

この人に
聞きたい
中村 哲さん



の診療にあたる。2000年のアフガニスタン大干ばつには、水源確保のため、井戸掘り事業を開始。2001年から「アフガニのちの基金」を設立、難民への食糧配布を続けている。現在はPMS院長、ペシャワール会の現地代表。著書に「ペシャワールにて」「ガラエ・ヌールへの道」「医者井戸を掘る」「医は国境を越えて」（石風社）、「アフガニスタンの診療所から」（筑摩書房）、「ほんとうのアフガニスタン」（光文社）などがある。

中村 哲 1946年福岡生まれ。九州大学医学部を卒業し、国内の病院勤務を経て、1984年からパキスタンの北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来、18年にわたって、らい（ハンセン病）を中心とした一般診療を続けている。1986年にはアフガン難民のための医療チームを作り、無医地区での診療を始める。1998年、PMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院をペシャワールに建設したほか、アフガンとパキスタンの10ヶ所の診療所を中心に、貧困層へ

——この3月に出された「ほんとうのアフガニスタン」（光文社）を読ませていただきました。

「ほんとうに知られていない国のひとつですね。この本は、講演した内容をもとに構成し、序文に井上ひさしさんの講演（『世界の真実と中村哲さんのこと』）を収録したものです。とにかくひとりでも多くの人に、アフガニスタンの現実を知ってほしい。現地での活動を支えてくれるペシャワール会のホームページは、毎週、更新していますし、年4回ですがペシャワール会報にも、現地からの報告を書いています。会員は7千人、入会はしないけれど応援するという人もいれると9千人以上です。現地での主な活動は、医療を中心に、農業のための干ばつ対策で井戸を掘る。都市部より農村部に重点をおいています」

——2000年の干ばつは今でも続いているんでしょうか。

「だんだんひどくなっている。医療やその設備を作るのは半永久的に続けますが、干ばつで砂漠化が進むと、10年も経てば、たいへんなことになるのではないかと。地球温暖化による干ばつで、いくら井戸を掘っても枯れる。アフガニスタンに限らず、なにか、終りの始まり、という

気がします」

——何千メートル級の山からも雪が消えたとか。

「山からの雪どけ水で、アフガニスタンは、メロンやスイカなどの果物やナッツ類が豊富に穫れたのですがね。いまは氷河が滑り落ちるとか嘘みたいなことが起きている」

——もともと、パキスタンに行かれたのは、登山隊のお医者さんとして、ですね。

「山登りが好きで、蝶々が好きで……。1978年のティリチミール遠征隊に参加。で、4年後に、日本キリスト教海外医療協力会から、ペ

■カブールのカライザマンカーンにある診療所。この地域の数十万人をカバーする。子どもたちの表情は、明かるい。（2002年4月）



■ペシャワールの北西、アフガニスタンのガラエ・ヌールの灌漑用井戸は直径5メートル。井戸の底に降りる中村医師。（2002年4月）



*ペシャワール会提供

シャワールで働いてくれと要請が来た。あそこは、気に入ってますから行ってもいいですよ、と。それが、次から次にいろんな事が起きて、一生懸命やっているうちに18年も、というのが実状でしょうね。はじめはこんなにも長くというとは思っていませんでした。信念とかでなくて、まさに縁としかいいようがない」

——ペシャワールでは、ふだんはPMS基地病院が中心ですか。

「だいたいここで診療しますが、干ばつになってからは、かなり広域にわたって活動しなくちゃならない。このごろは病院にいるのは3分の1くらいですか。病院ができて、4年になります。現地スタッフや日本人のなかで、責任感のある人もたくさんいます。そういう人たちで成り立っているんです。現地のしきたりとも折り合いをつけながら、ということ、日本人で長い人はもう12年とかになる。心強いですよ」

——干ばつ対策の活動となると、どういうことをするんですか。

「干ばつは主にアフガニスタンです。から、じつさいに水の枯れた灌漑用の井戸から、石や土砂を掘り出します。作業地ではいまのところ、食べものや水は、比較的足りてはいるんですが、井戸の水位は、何メートル

という単位で下がっています。地下水が残っているあいだは、それを飲みつないでなんとか生きています。この状態が長く続くと致命的。おもったより深刻ですよ」

——爆撃は今でもあるんですか。

「まだやっています。今でも（3月末）やっています。井戸掘りの作業場から、50キロほど離れていますが、音は聞こえますね。作業地が爆撃されるといこともありました。そういうことをいっいち言っても何もできません。これで仕事を休むと、みんな生活ができなくなる。私には責任があるし、逃げ出すわけにはいけません。らい、マラリア、干ばつと、ひとつかたづけばまた次。こんどの干ばつは並みの干ばつじゃない」

——現地と日本との行き来はどんな具合ですか。

「ペシャワールに3カ月、日本に1カ月くらいのサイクルですね。この3月は、東京、浦和、郡山、米沢、兵庫県の尼崎、名古屋と講演ばかりでした。とにかく現地のことを知るだけ出かけるようにしています。これからも、ペシャワール会の活動に協力いただければありがたい。これは、半永久的なプロジェクトとおもっています」